

---

# みりあっしゅ！

むさく

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

みりあつしゅ！

### 【Nコード】

N4571M

### 【作者名】

むさく

### 【あらすじ】

「ある朝目覚めると、俺の腕がきもちになった。医者に掛かってもらえないし、友人の修は呪いだの魔法だの妙なことを言い出す始末。

その上に、窓から変な子が突っ込んできたりするし。

ああ、俺の日常生活は一体どこへ消えてしまったのやら……。」

なんの異能も持たない普通の少年と、それを取り巻く異能を描いた、異世界冒険ドタバタコメディ。

## 不気味な腕と不思議な来訪者（前書き）

本作品は、きつと厨二くさいです。

そういう設定や表現が苦手な方は、我慢してお読みください。

逆に、そういったものが好物だという方は、ある程度期待してお読みください。

## 不気味な腕と不思議な来訪者

夏休みに入って間もないある日。向井悠也は、ここ数日で悩みを抱えていた。

恋愛沙汰や将来の不安といった、歳相応のものではない。

「はあ……」

無意識のうちに溜め息を吐き、ちら、と自分の右手を覗くように見た。

「……うわ」

なるべく気にしないように、と思っていたが、やはり目が行ってしまう。このインパクトにはなかなか慣れることができなかった。

悠也の右手は、およそ健康的な高校男児には決して似合わないものになっていた。

異常なのだ。色が。

彼のシャツの袖の先だけを見た人は、ナメック星人、なんて感想を抱くかも知れない。

それほど、悠也の右手は鮮やかな緑色をしていた。

「気味悪いよな……はあ」

再び溜め息が出て、一昨日のことを思い出す。

右手の異変に気付いてすぐ、悠也は病院へ足を運んでいた。

変色の原因にこそ心当たりはなかったが、それが異常であることくらいは理解できる。

なにかの病気だろうか？と思い医者に診てもらい、そしてその答えは悠也の予想を大きく裏切った。

「病氣や怪我には見えないねえ。少なくとも、ウチでどうにかできるものじゃないなあ」

少々間延びした医師の言葉を要約すると、つまりはそういうことだった。

すぐには治せないにしても、せめて原因がわかればいくらか気も楽になったのに　もちろん解決できるに越したことはないのだが　医者にもわからないという事実が、さらに不安が上乘せされる結果となった。

今のところ、右手以外に何か症状が出たということはない。右手にしても、色が変わったこと以外はなんら問題はないようだった。だが、それも今だけのことなのかもしれない。やがて全身緑色に染まって、見事なナメツク星人に……馬鹿馬鹿しい想像をして、つい吹き出した。

すぐ我に返り、下らない妄想を振り払うように頭をぶんぶんと左右に振る。そんな笑い事ではないかもしれないのだ。

両手で頬を叩き、勢いよく立ち上が

「あたっ」

ろうとして、後頭部を思い切り打ちつけた。

驚いて振り向いたら、そこにいたのは見慣れた女。

「んなっ……修！いきなり現れんな！そして人の頭を殴るな！」

修、と呼ばれた女は、さも心外だと肩を竦める。

「いきなりではないぞ、ちゃんとおばさまに通してもらったからな。それに殴ってもない。お前の頭上に肘を突き出していたら勝手にぶつかってきただけだ」

お前な……と呻くが、こいつにどんな文句を言っても面倒くさくなるだけなので、悠也は口をつぐんだ。

修と書いて、読み方は「しゅう」だ。

上は黒いスウェット、下はジーンズというシンプルな格好はいつもどおり。

背丈はやや小柄、だが整った顔立ちや適度に成長したボディラインから、幼くは見えない。

黒く透き通ったポニーテールは腰まで伸ばし、気の強そうな瞳をまっすぐ悠也に向けて、一言。

「そうだ、言うのを忘れていた。お邪魔します」

神崎修と向井悠也の関係は、簡単に言えばクラスメートだ。具体的に言うとなると、悠也自身もうまく説明できない。

男女の関係を持っていはいないとだけは言い切れるのだが。

悠也はさりげなく右手を隠しつつも内心びくびく、見られちゃいないかと思いつつも問いかける。

「それで、一体何の用だ？連絡もなしに来るなんて珍しいじゃないか」

修はふむ、と間を置き、用件を語りだした。

「実は頼みごとがあつてな。急ぎではないのだが」

だからそれは置いておいて、と言外に、修はペットボトルのお茶（悠也の）を一口含む。

「ふう、一口いただくぞ」

「言うのがおせえよ……」

悠也は呆れ、しかしいつものことなのでそれ以上掘り返しはしない。

間接的に口をつけたことにも、もう慣れてしまったので特に気にしない。

「これは失敬」

悪びれる様子もなく、鼻で笑い飛ばす修。これにも慣れた。悠也

の表情は至って平常。

「で、だ。一体どうしたんだ、その手は」  
平常のまま固まった。

しまった。

「あー、えー」

「なんだ、要領を得ないな」

手のことは家族以外には話してないし、見せてもなかった。  
友達に見られたら気味悪がられたり、避けられたりするんじゃないか。

説明しようにも、自分でもなんなのかわからないから余計変な目で  
見られるかも。

それが怖くて、ここ数日学校では手袋をつけていた。

なのに、見られてしまった。

それも、密かに恋心を抱いていた修に。

そう、実は悠也は修を好いていた。

家上がり込む仲にもなったし、そろそろ次の関係に進展できる  
かな、なんて思っていた。

でも、これでもう終わりだ。嫌われて、避けられて、通報されて、  
解剖されて、どこかの研究所で中身を全部引っ繰り返されて……

「……なんて思ってるのではなかるうな？」

「どこまでぶっ飛んだ思考回路してるんだよ……」

以上、修の勝手な思考代弁であった。

「まあ、後半の捏造と与太話はどうでもいいとして、確かに他人には見られたくないとは思ってたな」

悠也は少しづつが悪そうにそっぽを向く。

そんな悠也を見て、修はぽつりと呟く。

「私への恋心も与太話扱いなのか……」

「それは捏造のほうな。あと意味なく目を潤ませるな」

ノリの悪い奴だ、と媚びモードは一瞬で終了。これにも慣れた。

「話を戻すが、その手は一体どうしたというのだ」

修にも隠してこそいたが、本気で見られたら嫌われると思っていたわけではない。

ただ普通じゃないことが恥ずかしくて目立たせなくなっただけだったので、悠也はいまさら隠しだてるようなことはしなかった。

「詳しいことは俺にもわからないんだ。一昨日起きた時にはこんなことになってた」

修はふむ、と顎に手を当てて、

「近くで見せてもらってもいいか？」

「ああ」

悠也が差し出した右手を取って、修の端正な顔が近付けられる。

その様子はまるで、お伽噺に出てくる姫の手の甲にキスをする騎士のようで……それだとポジションが逆か？

どっちにしろ自分はそんな柄じゃない、と首を振ったところで、右手が解放された。

「何かわかったのか？」

「だいたいわかった」

マジかよ……と悠也は唸る。

確かに、いつも何を聞いても見せても修はあっさり答えてしまうが、今回ののは医者にも解決不能なのにかかるというのか。

「悠、お前は誰かから恨みを買っているのか。それも殺意を抱くほどの」



「……は？」

と、急に修が変なことを言い出した。

「これな、呪いだよ。呪い」

「……はあ？」

「症状だけでは具体的に何か、までは判別できないがな。ある程度は予想できる。『対象を腐らせ、死に至らす』という類……ナメクジかなにかから連想しているのか？ 大方、西洋の黒魔術あたりだろうな」

修は饒舌だ。

「……」

対称的に悠也は啞然、そして呆然。口はみっともなく開いたままだった。

「ん、どうした？」

「お前……悪いもんでも食ったのか？」

「む、どういう意味だ。私を変人扱いしようというのか」

とたんに修の声は陰を孕み、むっつり顔で不機嫌モード。

「えっと……まあ、うん」

「なんて奴だ、失礼な！ 私は好意で教えてやってるというのに」

意外にも猛反発してくる修に驚きつつも、悠也にとって修の話は眉唾ものなのだ。幽霊魔法ポルターガイストもろもろを一切否定する一般的な正論で対抗してやる。

「だってよ、そんな急に呪いだの魔法だの言われても信じられねえよ」

「魔法ではない、黒魔術だ。信じられないというのなら、ひとつ試してやるっ」

はあ、と小さくため息を吐いて、修が席を立つ。

「おい、どこ行くんだよ？」

悠也の問い掛けに、修は悪戯っぽく口の端を曲げて、一言。

「外だ。悠もついてこい」

修の進む先へついていくと、たどり着いたのは人気のない公園。

「何をするんだ？」

「ちよつとな。すぐ済む」

悠也の質問にも修は笑ってはぐらかすだけ、そしてベンチに腰掛けた。

続いて悠也も座ろうとしたところで修が制する。

「なんだよ、俺は座っちゃだめなのか？」

「そうだ。悠はそこに立ってなさい」

悠也のぼやきも耳を傾けず、んふふー、とちよつと下品に笑いながら修はポケットからペンを取り出した。

「つて……おい、何やってんだよ!？」

何を始めるかと思つたら、おもむろにそれでベンチになにやら書き始めたのだ。当然悠也は止めにかかるが、

「いいからちよつと待ってなさい。それに、これは水性だからすぐに消せる」

と突っぱねる修。仕方なく見守っていると、修の書いていた、いや描いていたものが形になってくる。

「これは……魔方阵、ってやつか？」

「そうだ。簡易なものだな」

ベンチに描かれた模様は、よく漫画などで出てくる紋章のような形状だった。

「初歩的な黒魔術を使うんだ。これを見れば悠も信じる気になるだろうから」

「えー……」

いつの間にか本格的に魔法を始めようとしている修を見て、悠也はちよつと複雑な気持ちになった。

「ここに手を置いて。水性だからあんまり擦ると消えちゃうからな、

気を付けて」

修に促されるまま準備を進める悠也。先ほど修が描いた魔方陣に左手を乗せていて、その上に修の右手が添えられている。

「これで終わりなのか？」

ポーズの関係上、至近距離で悠也と見つめ合う修はいや、と首を振り、

「まだ最後にひとつだけやる残ってる」

「なんだよ」

「悠、私にキスをしろ」

「はあ！？」

とんでもないことを言い出した。

「キ、キスって、お前それでいいのか！？」

突然の急展開に大いにテンパる悠也。見くびってもらっちゃあ困る、これでもそうだった経験は皆無だ。

「私は構わん。悠は大丈夫か？」

「だ、大丈夫って……」

一旦思考停止。状況を把握し直す。

今まで修をそういう目で見たことはなかったが、正直、修は端目から見てもかなりの美少女の部類に入る。

きっかけこそわけのわからん魔法がどうたらだが、これは実際、かなり棚ぼたな展開なのでは……？

そう思うと、目の前の少女に見つめられているのが無性に恥ずかしくなってきた。

「……まあ、俺も嫌ってわけではないぞ」

照れ隠しにそっぽを向いて答える悠也。

一方、修は恥ずかしげもなく笑顔で言うのだ。

「ならよかった。それじゃ悠、頼む」

男・向井悠也、人生の山場にぶち当たった、かもしれない。

「それじゃ……行くぞ」

と言いながらも、心中では「どうしよう俺息臭かったりしないかな？」とか「目を瞑るのがマナーなんだっけか」とかパニック状態。心の準備なんてまるでできていなかった。

ゆっくり深呼吸を一度、二度。……よし。

と悠也が顔を上げたところで、修が言う。

「ちよつと待て悠。まさか私の口にキスをしようとしてるんじゃないかなろうな」

「……え？」

いや、だってキスってあのキスだろ？ 嬉じゃなくて……とか変な思考を無理やり止めて、

「いや……違うのか？」

「当たり前だ、そんなわけがないだろう」

「……」

即答で否定。

今の「そんなわけないだろう」で悠也が受けた心のダメージは、何気なくけっこう大きかった。

崩れそうなハートを必死に保ちながら悠也は顔を上げて聞く。

「……それじゃ、一体どこにすればいいんだ？」

「決まってるだろう？ 靴だよ」

「なっ……」

「さあ、這いつくばって私の靴を舐めろ。それで魔術は発動するか。ほら」

軽く悦に入った表情で靴を突き出してくるのがどこか艶っぽい。

悠也は一瞬吞まれそうになったが、すぐに我を取り戻す。

「どこからどう見ても服従の誓いじゃねえか！ 何が悲しくてお前に従わなきゃいけないんだよ！……」

ハートの崩壊を通り越した一斉蜂起を前に、修は信じられないと  
いった顔で悠也を見返す。

「えっ……」

「えっ」

「私の物になるのがそんなに嫌だったなんて……」

「むしろ、それがいいって前提で話を進めてたのが信じられねえよ  
……」

結局キスの話はうやむやになり（というかさせた）、二人は一旦  
悠也の部屋へ戻ることにした。

「そもそも、今のを外でやる必要はあったのか？靴にキスするところ  
なんざ、誰かに見られる可能性のある外でなんてやりたくねえよ」  
家の中でも嫌だけどな、と付け足す悠也に修が答える。

「誰かに見られたほうが興奮するじゃないか」

「お前、実はけっこう変態だろ？」

下らないことを言っているうちに部屋に到着。悠也は座布団、修  
はベッドに腰掛け、それぞれの定位置につく。

これで状況は振り出しに戻った。アホなことをするばかりで、本  
来の問題は一切解決に向けて進展していない。

「このままじゃ埒があかないから、この際魔法だのも信じることに  
しとく。だから話を進めてくれ」

「……少し言い方に引つ掛かるが、まあいいでしょう。それでは本  
題に入るが」

その時。

「……ああああああっ！！」

ガシャーン！と、マンガみたいな音で窓が大破し、そこから何  
かがすさまじいスピードで飛び出してきた。

「うわっ!？」

「っ!」

突っ込んできた何かは、轟音とともに部屋の奥に衝突した。

幸い、その進行方向には誰もおらず、二人は身を竦めるだけで無事だった。

むしろ、一番の被害者は

「お、俺のパソコンがああああ!？」

悠也の机の上で煙を上げる、無惨な姿をした箱型機械のようだった。

## 魔法少女は不思議っ子

「いつ……たたたあ……」

しばらくして、先ほど飛び込んだ何かが、さっきまで机だった瓦礫からひよっこり顔を出した。

「はうあ……また失敗しちゃった……」

悠也の部屋へ墜落した破壊者の正体は、一人の少女だった。

年齢はおそらく十四、五といったところだろうか。肌や瞳の色、顔立ちから、日本人ではなく西洋の人間に見えるが、その口から出たのは日本語のようだ。

星のついた紫色のトンがり帽子を被り、身に纏うのは薄桃色のひらひらしたドレス。スカートの長さは膝が見えそうなくらい短い。右手には逆さにした箒を持ち、左手には先端に綺麗な装飾のなされた紫色のステッキ。

彼女の容姿を簡潔にまとめるなら、魔法少女だった。

ただし、この時の悠也に少女の服装を気にする余裕などなく、ただ自分がこつこつ貯めた貯金をはたいて、先月ようやく購入に踏み切ったパソコン（¥99,800、税別）の残骸を前に、茫然自失としていた。

「あ、あ……」

言葉を忘れ去ってしまったように、間の抜けた声を漏らす悠也の前で、少女は不器用に瓦礫を這い出る。

その際、破壊された中でも原型を留めていたハードディスクなどを踏みつけ、バキッ、という音とともに、既に息絶えたパソコン（と悠也の精神）にさらなるダメージを与えながら。

「……ふう」  
「……」

少女が瓦礫から這い出た時には、悠也は既に真っ白に燃え尽きていた。

灰になった男を無視して、一步前に出たのは修。

「単刀直入に聞こう。君はいったい何者だ？」

「はいっ！？」

「いやそんなに驚かれても。むしろ突然の乱入に驚いてるのはこっちなんだけどな」

「あう……すみません……」

心底申し訳なさそうな顔で縮こまる少女に苦笑しつつ、修は（普段悠也には見せない）穏やかな笑顔で空気を和らげる。

「私はなんの被害もないし、この男の私物なんて壊れたって問題ないようなものだから、わざわざ謝ることもないよ」

「え、ええ？そんなんですか……？」

「そんなものさ。私は神崎修。この呆けてるのは向井悠也だ。よろしく」

「あ……よろしく願います」

軽やかに、あるいは軽々しく無責任な発言と自己紹介する修の雰囲気は吞まれ、何も考えずに返事をする少女。

「さて。君はいつたい、どこから、どんな理由でやってきた、どちら様かな？ついでに言うなら、なぜこんな急襲のような訪問方法だったのかも聞きたい」

「え、あ、ええ？」

そして、突然の質問の嵐に、少女は呆気にとられる。

修は意地悪そうに、あるいはからかって満足そうに、笑いながら続ける。

「いっぺんに聞きすぎたかな？答えられるものから答えてくれれば



「いいよ」

「……えと、その……」

しかし、少女の口から出るのは煮え切らない返事だけ。

「何か言えない事情でもあるのかな？」

「……いえ、そういうわけじゃないんですけど……」

「だったら話してほしいな。謝る必要はないが、いきなり人の家に、それも窓を破って現れたのなら説明のひとつは聞きたいものだ」

修の表情にも口調にも変化はないが、どこことなく凄みを滲ませていた。

なお、人の家などと言っているが、ここは修の家ではない。

「はうあ……」

笑顔でプレッシャーを放つ修に押され、気の弱そうな少女はさらに縮こまり、消えてしまいそうだった。

そんな様子を見ては、修といえど少々ばつが悪い。

「……済まない。別に責めたてるつもりはないんだ」

多少滲ませていた険がとれた修の変化に気づき、少女は顔を上げる。

彼女はしばらく逡巡するような表情を見せていたが、やがて口を開いた。

「……その、いきなりでは信じていただけにないと思うのですが……」

「わたし、魔女なんです」

「……」

沈黙が流れる。

少女は一瞬だけ哀しそうな顔をしたが、すぐに笑顔に変わった。

「……なんて、冗談ですよー。魔女なんているはずないですし……」

そう言う少女の笑顔はどこか不自然で、貼りつけたような印象がとれた。

が、

「……ふむ。いや、そうとも限らんよ？」

「え？」

「私はこれでも、オカルト方面は割と信じているクチでね。まあ、そういった見地から言わせてもらえば、君の格好は少々胡散臭すぎるが」

「へう……」

不意をついたダメ出しにへこむ少女。

彼女の心境を知ってか知らずか、修はとにかく、と言い切る。

「君が魔女である、という話はひとまず信用することにするよ」

「ほ、本当ですか!？」

「本当だよ。今ここで嘘をつく意味もないしね」

目まぐるしく変化を続ける少女の表情がようやく弾けた。

先ほどのぎこちない笑顔とは違う、心の底からの破顔は、眩いほどに綺麗で、つられて修も微笑みをこぼした。

「どうぞ」

「あ、失礼します」

修は無事だったベッドに腰掛け、その隣にミアを座らせた。

「それで、名前はなんというんだ？このままでは呼び方に困る」

「あ」

そっちが先でしたよね、と照れたように笑い、少女は自らの名を告げる。

「エミリア・シュトローム、といます。友達にはミアなんて呼ばれたりするので、そう呼んでいただけると嬉しいです」

「そうか。よろしく、ミア。私のことは修でいいよ」

「はい、修さん、よろしくお願いしますっ」

「呼び捨てでいいよ」

「あ……すみません……」

「別に謝らなくてもいいってば」  
間髪入れない突っ込みに、ミリアは再び謝ろうとして、口をつぐむ。

「あう……でも、やっぱり修さんのほうが呼びやすいです……」

「ならそれでいいよ。もし意識して敬語を使ってるなら、その必要はないと思ったただだから」

「これは口癖みたいなもので……変、ですかね？」

「そんなことないよ。とにかく、変に気負わずに接してくれればいい」

ミリアは嬉しそうに、帽子の鰐を弄りながら笑顔で頷いた。

ミリアの表情には、もはや不安や緊張は一切なく、完全に修に心を許しているようだった。

「でも、修さんがいい人でよかった。魔女だからってことで拒絶されるのが怖かったから」

「人が魔法を信じられないのは、その者の常識に反しているからだ。常識などというものは、時に容易く引っ繰り返るものだ。しかし、大抵の人間はその変化を受け入れられない。全く、魔女という存在は肩身が狭そうだ」

「……でも、修さんみたいな人もいますから」

「割合は実に少なさそうだがね」

ミリアは困ったように笑う。

「……では、本題に入ろうか」

「ほえ？とかいう間抜けな返事をするミリアを置いて、修は最後の質問をする。

「一体どこから、どんな用事で来たんだ？まさか、偶然ではあるまい」

「……それは……」

ミリアの笑顔に、再び影が差す。

「まあ、概ね予想はついているよ。まずは、悠が別世界から戻るのを待とう」

悠也を顎で指す修を見て、ミリアは思い出したように表情を強張らせた。

「あ……あれってやっぱり大事なものなんですよね……どうしよう……」

「大丈夫だってば」

「あうう……」

なお、悠也が我に返ったのはそれから十五分が経った頃であった。

「おはよう」

「あ、ああ……」

ようやく返事をした悠也の表情は、苦虫と梅干しをいっぺんに噛み潰したようなものだった。

さらに、

「あ、あの……ごめんなさい……大切なものを壊してしまって……」  
目の前に映るのは、泣きそうな顔で謝罪を繰り返すミリアの姿。  
経緯を考えればミリアは不法侵入と器物損壊の犯人であり、悠也には責めるどころか訴える理由すら充分にあるのだが、いたいけな少女に半泣きで謝られる状況では、悠也にしても責める気にもなれない。

結果的に、

「あー……いや、まあ、パソコンなんてまた買えばいいし、さ……特に大事なデータがあるわけでもなかったし……」

大事なデータがあまりないのは買ったばかりだったから、というのはさすがに言えなかった。

「ほら、大丈夫だったろう？基本的に悠の私物は、壊してもごめんで済む問題だから気にしないでいいよ」

「……修、俺はなんとなくお前が腹立たしい」

「やり場のない怒りを何も悪くない身近な人にぶつける八つ当たりか。おおこわいこわい」

確かに修は何もしていないのだが、態度や言動から、自分には修を責める権利があると確信する悠也であった。

「……まあいい。とりあえず修、説明を三行で頼む」

順調に溜まるストレスを必死に抑え、悠也は努めて冷静に聞く。  
こういう時は、とりあえず修に説明を求めればだいたいわかるものなのだ。

「彼女はミリア。ミリアは魔女。ミリアは悠に用があるそうだ」

「へえ……はあ!？」

しかし、残念ながら今回はよくわからなかった。

「また魔法か……」

悠也は力なくため息をついた。

「信じていただけじゃないでしょうか……?」

そして、眼前にはなおも潤んだ瞳のミリア。チワワとかの愛玩動物を連想させる目だ。

この状況に対しても、またか、と言いたかった。

「あーくそ、信じてやらあべらばうめ!」

半ば自棄になり、よくわからない叫び声をあげる悠也。

すでに、修の前で魔法を信じる宣言をされていて、その上パソコン大破という衝撃を乗り越えた現在、悠也はなんでも来い状態にあった。

「よかったあ……」

とりあえず、この子の泣きそうな顔は反則だと思う。

「それで、……ミリアさん、だっけ？」

「あ、呼びつけで構いませんよー」

「わかった。えーと、ミリアは魔女なんだよな」

「そうですよ。お望みなら、簡単な魔法もお見せできます！」

そう言っ胸を張るミリアのそれは、うつむ、意外と……。

童顔巨乳、などという単語が浮かんだ雑念を慌てて振り払い、普通の調子を取り繕って悠也は返答する。

「んー、それも興味あるけど、今は先に話を聞きたいな」

「そうですか……」

今度は露骨にしょんぼりしてしまうミリア。なんというか、感情の起伏が激しい子だ。

悠也が普段親交のある異性というと、オールウェイズポーカーフエイスといった修くらいなので、こういう反応は新鮮でもあった。

「……」

と、なぜか修が悠也をじっと見ていた。無表情で。

なんとなく恐怖を感じ、悠也は慌てて思考に区切りをつける。

「ま、まあそれは後で見せてもらうとしてさ。その魔女が俺に用があるってことは。……やっぱ、こいつの話なんだろ？」

そう言っ、悠也は右手を肩のあたりまで持ち上げてみせる。

ついさっき、修から黒魔術だの呪いだの言われたばかりなのだ。

突然魔女が現れたりしたら、関係があると思えない。

「……そうです。それはわたしが掛けた呪いです」

「そっか……」

返答に得心すると同時に、悠也は考える。

修いわく、これは強力な呪いで、こんなものを掛けられるとなれば、その相手には相当恨まれてるらしい。

ミリアとは当然面識もないし、あったとしても様子を見る限

りは嫌われてるようでもない。

そもそも、呪いを掛けたのならわざわざここまで来る必要もないはずだ。

なら、一体ミリアはどういった理由でやってきたのだろうか？

そこまで考えたところでふと前を向くと、何かが勢いよく飛び込んでくるのが目に入った。

「ごめんなさつ、あ痛っ！！」

「はうあっ！！」

その正体は、突然頭を下げたミリアの頭。その目の前には悠也がいて、ミリアの被るとんがり帽子の先端が、ちょうど悠也のデリケートな部分へ突き刺さる。

勢いよく頭を下げたところで、帽子がなにかにぶつかって、バランスを崩してそのまま前につんのめる。

ミリアは、お辞儀からそのままコケするという珍技を披露してみせた。

「あいたたた……」

それでも、ミリアは鼻を軽く打ったくらいの軽症。  
対して、

「……………！！」

悠也は声すらも出ず、股間のあたりを抑え、苦悶の表情で転げまわっていた。

そんな様子を醒めた目で眺める修が、ポツリと呟く。

「……………何をしているんだ、君たちは」

## 腕の真相と危険な肉食獣

「今日の悠は、精神的だったり物理的だったり、バリエーション豊かにダウンしきりで大変だなあ」

「ああ……まったくだよ……」

ようやく男の痛みを乗り越えた悠也は疲れ切った面持ちで、修の皮肉に掛け合う気力もないようだった。

修も悠也に向けてはそれ以上特に何も言及せず、視線を天井へ向けてボソツと。

「それで、その度に待たされる私の気持ちも、誰か汲んではくれないものかな」

「ごめんなさいい……」

修の声もテンションも低い呟きを耳がキャッチし、小柄なミリアはますます縮こまる。

しばらく微妙な空気が流れた後、修がふっと愁眉を開いた。

「まあ、実際には別に気にしちやいないよ。ほとんどからかいたかっただけだし」

それはそれでやだよなあ……とかいう悠也の突っ込みはさらりと受け流して笑う修を見て、ミリアは胸を撫で下ろした。

「……えと、それじゃご説明しますね。先ほども言いましたが、悠也さんに呪いを掛けたのはわたしです」

「……」

悠也にも思うところはあったが、ひとまず黙って話を聞く姿勢を保った。

「ただ、悠也さんを狙って掛けたものではありません。わたしが魔術の実験をしていたら、その呪いが暴発してしまって……すみません」

また長くなりそうなので、悠也は謝罪モードに入ろうとするミリアを制した。



「それはもういい…… かどうかは微妙なところだけど、とりあえず続けて」

「……はい。その呪いは、全身に廻り切るまでは、体色以外は人体になんら影響を与えないものです」

「あー…… なるほど」

悠也は先日 of 医者 of 対応を思い出した。体に異変がないんだから、何かが見つかるとは思えない。

「しかし、もし全身に廻り切ってしまうと、呪いを受けた人はその瞬間に…… 命を落とします」

「……」

言葉に飾り立てようがなかったのだろう、一瞬の躊躇いの後、ミアは重々しくそう言い切った。

「タイムリミットはおよそ一週間。掛かったのが一昨日なので、あと五日ほどで限界に至ります」

「……そんな説明をわざわざするってことは、今この場で呪いを解いたりできないってことか」

「……すみません……」

凶星、と言わんばかりにミアは目を伏せる。

「……ただ、解呪の方法がないわけではありません。魔界の奥地にある、聖霊の泉の聖水を一口飲めば、呪いは浄化されるはずですよ」

「魔界、ねえ……」

いよいよファンタジーみてきた単語に反応する悠也だが、さすがにその表情は芳しくない。

と、ここまで黙っていた修が口を開いた。

「眉唾だと思うか？」

「まあ、半分はな。もう半分は信用する。ミアが嘘言ってるようにも見えないし、登場の仕方もあるが」

「ふむ……」

修は少し意外だった。実際に魔法を見てもいない悠也が、ここまで柔軟に対応するとは思ってなかった。

「というか、俺にしてみれば、お前のほうがよっぽど不思議だぞ。さつきからむしろミリア側のスタンスで喋ってるけどよ、一体何者なんだお前は？」

「何者もなにも、私はただのクラスメートだよ。一体何を疑っているんだ」

「どうだかねえ」

「まあ……もつと深い関係になったら、イロイロ教えてあげてもいいけどな」

なぜか「イロイロ」の部分強調する修。

「……お前なあ」

「も、もつと深い関係って……なんかすごそうですー……」

「何を想像してるんだよ……」

「つて、また話が脱線してるじゃねえか！」

悠也の叫びではっと我に返ったミリア。慌てて説明を再開した。

「え、えつとですね。つまりはその聖水があればいいので、本当はここに持ってきたかったんですけど……ここでちよつと問題があるんです」

「問題？」

「この世界から魔界へ行くには、二つを繋ぐゲートを通らなければならぬんです。けど、そのゲートは常にかいてるわけではなくて、十日に一度しか開かないんです」

「え、それってマズくないか？」

「次に開くのは明日の正午だから、行くまでは間に合っんですけど……」

「俺が自分で行かなきゃタイムアップ、ってことか」

悠也の頬に汗が伝う。まさか、冗談抜きで自分が魔界に進出するとは思っていなかった。

「はい……本当に、こんなことになってしまつて、ごめんなさい……」

そして、ミリアが今日何度目かわからない、「ごめんなさいモード」に移行しそうになるが、

「ふんぬっ！」

「あいたー！？」

悠也はそれをデコピンで阻止。

「もういちいち謝るな。こうなっちゃったものは仕方ないんだからさ」

「……はい」

「そうとなれば、まずは準備しないと。魔界に持つてかなきゃいけないものって何だ？……というか、お袋になんて説明するべきか」  
「おばさまは寛容な方だから、ありのまま話しても大丈夫だと思うぞ」

修がさらつとんでもないことを言い出した。

「いやいや何を言いだすかなお前は！？いくらあいつでも信じられるわけねえだろ！？」

「悠は信じたのに、おばさまは信じないと言うのか？私の尊敬するおばさまはそんな器量の狭い方ではないぞ」

「……あれを正面きつて尊敬するって言えるお前がちょっと心配だが……ま、そう言っなら修に任せるよ」

任せる、と言って部屋を出ていく修。

悠也はそんな修を尻目に、一緒にミリアのことも話さなきゃ、と思いつつ彼女を見ると、

「あ、うあわわ……」

自らが破壊した窓と故・パソコンとを交互に見ながら青ざめていた。

「どうしよう……さっきは気が動転してて思い当たらなかったけど、おうちの方になんて言ったら……！」

今も十分動転している、と悠也は思うが口には出さない。

慌てふためくミリアの様子を見て、苦笑しながら声を掛けた。

「あー……たぶんそれだったら気にしなくてもいいと思うよ？うちの  
人、なんというかいのろとアレなんで」

「アレ……？」

そ、アレ、と雑に返事をして、

「だからミリアは気を付けろ。ミリアはたぶんあいつの食指が動く  
タイプだから」

「……？」

意味深な忠告をくれた悠也に、ミリアが小動物のように首を傾げ  
た。

その時。

「やああああああんほんとにかあああわいいいいい！！」

「ひえええっ！？」

階下から超高速で飛び込んできた何者かがミリアに思い切り抱き  
ついた。

「くそっ！やつぱりドストライクだったか！！」

「済まない、私では止めきれなかった……！」

何者か 見た目二十代の女性の横行を前に齒噛みする二人。当  
然ながら、ミリアはなにが起きてるのかさっぱりわからない。

「あああの、お姉さんは一体どうしてわたしに抱きついてわわわわ  
わわ」

「いいのよそんなことは！どうでも！！ああ、今どきこんな魔女っ  
娘コスの美少女が息子の部屋に来るだなんて！！悠くんも修ちゃん  
って子がいるのに罪作りじゃないのさ！！」

ミリアの言うことなど何一つ聞かず、女性は昂ぶるテンションの  
まま激しく頬擦りする。

さきに、彼女に息子と呼ばれた悠也が引き剥がしにかかった。

「とりあえず落ち着けお袋！このままじゃミリアが死ぬ！あと俺と  
修はそういう関係じゃねえ！！」

悠也が最後の語気をひときわ強めたところで、ようやく女性

悠也の母からミリアは解放された。

「はあ、はあ、はあ……」

気付けば、全員が息を切らしていた。

悠也の母、向井翔子。初対面にして、ミリアにトラウマを植え付けた事件であつた。

「さつきは取り乱してごめんね、ミリアちゃん。私は悠くん……悠也の母、翔子よ」

場所は替わつて、向井家居間。さすがに悠也の部屋に四人は窮屈なためだ。

翔子は柔和な微笑みを浮かべてそう言う。だが、それを受けるミリアは顔を引きつらせていた。

「あ、あはは……えと、すごい若いんですね。わたしでつきり、悠也さんのお姉さんかと……」

お世辞ではない、正直なミリアの感想を聞き、翔子の瞳がギラリと光る。

「ひっ!？」

「まあ、たたく嬉しいこと言ってくれるじゃないのさこの子ってばいたっ!？」

「やめい!」

「ぶー。別に頭叩かなくなつていいじゃんさー。悠くんけちんぼー」  
けるつとした顔で文句を垂れる翔子に、悠也は頭を抱えてため息をついた。

確かに、翔子をぱつと見たら悠也の姉と思つてしまうのも頷ける。肌はきめ細かく、かすかにブロンドのかかった短めの髪をさする指は白魚のよう。

ミリアの言うのもわかる、高校生の息子を持つ母親とは思えない

若作りだ。

加えて言うなら、翔子は黙っていればかっこいいタイプの美人とも言える。息子である悠也自身もそう思うほどだった。

しかし、彼女がひとたび口を開けば、

『美少女はいねがー！私がじっくりねっとり愛でてやるどー！！』  
変態だった。正真正銘の変態だった。

どうして自分の周りには、こう変なヤツしかいないのか……なんて身の上を嘆いていたら、変なヤツ一号が口を出した。

「それでおばさま、事情はわかって頂けたでしょうか？」

「んーと、ほつとくと悠くんが死んじゃうから、十日ほど魔界まで旅行に行くんだっけ？大変だろうけど頑張ってねー」

「軽いよ！お前いくらなんでも軽すぎねえか！？もう少し疑えよ！！」

「えー。だって本当のことなんでしょ？修ちゃんが言ってたし、冗談で言ってるわけじゃなさそうだったし」

「さすがおばさま、どこかの大衆論主義者とは言ったことが違う！」

「お前それでいいのか？修が言っただけで荒唐無稽な話を鵜呑みにしてていいのか！？あとお前は一言多いぞ修！」

悠也の突っ込みに、修と翔子が声を揃えてブーイング。悠也のこめかみはひくつくばかりだ。

「あの……魔法に理解を頂けるのは嬉しいんですけど……」

「ん、どしたのみいちゃん」

「み、みいちゃん！？」

「そ。ミリアちゃんだからみいちゃん」

雰囲気吞まれそうになりながら、ようやく切り出したミリアに對しても、翔子は容赦なくマイペースに切り返す。

「どうせあの窓とかパソコンのことでしょ。あんなもんみいちゃんを得るための代償とでも思えばあふん」

「得ないから。な、落ち着けや」

悠也のドメスティックバイオレンスな延髄チョップにより、今日何度目かのミリア貞操の危機は去った。

「さて……これでもいい話の後は伝わったかな」

「そうだな。そんなわけだからさ母さん、俺は明日から十日間家を空けるぞ」

「なんだいなんだい、さーみしーいなー！まあ私は魔界とか面倒だし行きたくないけど」

「そんなお前が一番面倒だよ……」

まさに天衣無縫。翔子のマイペースぶりには悠也も呆れるばかりだった。

その二人を横目に、修が訊ねる。

「それでミリア、今夜はどこで過ごすつもりなんだ？」

「あつ」

硬直するミリア。どうやら何も考えずにやってきたようだ。

天然つてのはこんなにも面倒なんだなあ……と心中で嘆息しつつ、悠也は助け船を出してやることにした。

「とりあえず、ウチでいいんじゃないか？」

「え、いいんで……」

と、ミリアの反応を遮って修が異を唱えた。

「何を言っているんだ！若い男女が一つ屋根の下寝るだなんて……何か間違いが起きたらどうするんだ！」

「起きねえよ！お前は一体なんの心配をしてるんだよ！」

悠也の反論は意に介せず、翔子も続く。

「そうね……ここは安全のためにも、みいちゃんは私と一緒に寝るべき――！」

「それだけはダメだ――！俺の部屋で寝るよかよっぱど危険だ――！」

そして、その悠也の言葉に反応したのはミリア。

「ゆ、悠也さんと同じ部屋で……！？」

「そりゃ例え話だよ！！そこで頬を染めるんじゃないやねえええ！！」  
もういっそ、こいつら全員爆発すればいいのに、とか思う悠也だった。



## 奇妙な友人は奇妙ゆえに

協議の結果、ミリアは修の家で寝ることになった。なお、最後まで反論し続けた翔子の意見は誰にも聞き入られることはなかった。

「……魔界、ねえ」

虫の合唱が心地よい夜。悠也はベッドに横たわり、右手を眺めつつ呟いた。

思えば、十日も家を空けるのはこれが初めてだ。今までの最長は修学旅行の四日。それも、今回は人類未開の地ときた。

「馬鹿げた話だよなあ……」

二度と帰れないなんてことはないだろうが、それでも不安は付き纏う。自分は呪いが解けなければあと五日の命らしいし、そもそも魔界なんて時点で不吉すぎる。

気付けば悠也は、修のことを思い浮かべていた。

「修……か」

思い返してみると、修と出会ってからというもの、だいたいいつも彼女が傍にいたような気がする。

いつの間にか、悠也にとって修が近くにいることが自然になっていた。

「明日から、あいつともしばらく会えないのか……」

そう思うと、少し寂しくもなるかな。

「……これは恋愛感情ってやつか?」と思い、でもなんとなく違う気がした。

なら、一体なんなのだろう。答えを考えているうちに、次第に悠也の意識は闇に沈んで行った。

「……で、なんでお前がいるんだ?」

「いつもの通りだ」

翌朝。まだ日も昇っていないうちに目覚めた悠也が最初に見たのは、修と

「お、おはようございます」

その影に隠れるように座るミリアだった。

「意外とかわいい寝顔だったじゃないか。ふむ、ミリアのもだが、無防備な姿というのもなかなかのものだな」

「お前なあ……」

悠也は怒ろうとして、なんとなく戈を収めた。

昨夜、あんなことを考えていたせいか……面と向かうのがちょっと気恥ずかしかった。

「今は四時半か。まだ時間的な余裕はあるな」

「ありすぎるだろうが……」

ゲート開放が正午。そして今は四時半。差し引きで七時間半の猶予があった。

とはいえ、悠也も相当早くから寝ていたのでそれほど眠くもなかった。

「そついや、ここからゲートまではどれくらいかかるんだ？」

悠也がベッドから出たので、そこに女子二人が鎮座。例によって悠也は床の座布団だ。

ベッドの上で足をばたばたさせていたミリアは、思い出したように答えた。

「そついえば言い忘れてましたね。えっと、ゲートは土地として存在するものではないんですよ」

「は？」

対する悠也の理解度はゼロ。

「あ、あう……」

ミリアは困ったように修に視線を送る。……彼女は説明というも

のが苦手なのか。

修は嘆息しつつも苦笑して口を開いた。

「恐らく、ゲートと聞いて悠也は大きな扉のようなものを想像したと思うが……言ってみれば、ゲートとはある種の異空間みたいなものなんだよ」

「異空間？」

「ああ。私たちが今いるこの空間とは別次元の空間。そこには、必要なものさえあればどこからでも一瞬で行けるんだ」

「へえ……で、その必要なものって何だ？」

「わかりやすく言うなら、入場券みたいなものかな。……そうだ悠、ここで初めての魔法体験ができるぞ」

「ほほう……」

そこで悠也の瞳の色が変わった。なんだかんだ言っで、魔法には興味津津なのだ。

「そりや、ジャンル的にはどんな感じなんだ？ルーラのあれか」

「だいたいあつてる。まあ、どちらかというと旅の扉に近いかな」

「あ、あの……何の話ですか？」

ミリア一人が置いてけぼり。すまない、と修は逸れた話の軌道修正にかかった。

「まず、ゲートに行くのに必要な承認カードを用意する。これはミリアが人数分持つているそうだ。魔法に携わる者なら簡単に手に入るから気兼ねしなくていいだろう」

「そっか。ありがとな」

「いえ、元はわたしのせいですから……」

悠也の感謝の意すらもネガティブに受け取ろうとするミリアを制して、修は続ける。

「ほら、いちいち暗くならないの。そのカードを持ったら、頭より高いところに掲げて呪文を唱える」

こんな風にな、と言いつつ、見本として修は手を挙げた。それを見て、悠也も真似を試みる。

「うん、そんな感じだ。それで、そのまま呪文を唱えればゲートに飛べる。呪文は短いからすぐ覚えられると思うが、これは後で教えよう」

「ああ、わかった」

「さて、ここまでで何か質問はあるか？」

「ひとつだけあるな。なんでわざわざこんな時間に来たんだ？」

「目が覚めたからだ。他に理由はない」

「なん……だと……」

それだけの理由で俺の睡眠時間は削られたのか……と硬直する悠也を無視し、修は隣へ向き直る。

「こんなものでいいかな、ミリア。……ミリア？」

ミリアは思考に耽っていたのか、修に呼ばれ慌てて顔を上げた。

「……あ、はい。ありがとうございます」

「なんだ、まだ眠かったのか？ ぼーっとしちゃって」

「あ……あはは、そうかもしれないです」

「まだ寝ててもいいんだぞ？ 時間は問題ないんだし」

「うーん……それじゃ、お言葉に甘えて……」

どこか危なげなまま、悠也のベッドにもぞもぞ潜り込むミリア。

「つておい、ここで寝るのか！？」

と、悠也の反応に驚いたのが、ミリアはベッドから顔だけひょこっと出した。

「あ……だめでしたか……？」

「いや、さっきまで俺が使ってたからさ。気にならないなら別にいいんだけど」

「ああー……わかりました。それじゃ、悠也さんの分も半分空けますねー」

一瞬、場が凍った。

「なっ……！？」

「何一つわかってねえ！何を言いだすんだお前は！？そして修も変な反応するんじゃない！」

しかし悠也の突っ込みも虚しく、ミリアは気にせず再びベッドに潜り込んでしまうし、修はなんだか冷たい空気を纏っていた。

「それじゃ、おやすみなさいー……わあ、悠也さんの匂いだあ……」

「……私は先に降りてるよ。邪魔をしたら悪いしな」  
ボタン、というドアを閉じる音が虚しく響く。

「……どうして俺だけがこんな目に……」

精根果てたように、悠也は誰にでもなく一人ごちた。

「……すう」

そんな彼などお構い無しに、ミリアは全くマイペースに寝息を立てていた。

「どうしてこいつはこんな無防備にいられるんだ……」

もちろん一緒に寝られるわけもなく、すっかり目も覚めてしまったので、修の後を追うことにした。

「あれ？せっかくのチャンスを棒に振るのか、悠」

「ひょっとして、お前はアホなのか？」

再び顔を合わせた修は、何事もなかったようにいつも通りの軽口を叩く。

さっきのもそういうからかいの一貫なのだろうと納得し、悠也も普段の調子で返した。

冷蔵庫から戻ってくるところだったらしい修は、白濁した液体の入ったマグカップを手に椅子を引いた。

一応注記するなら、マグカップの中身は牛乳だ。

「本当に寝ててもよかったんだぞ？まだこんな時間だしな」

起こした張本人が何を言うか、なぜ勝手に人の家の牛乳を飲んで

いるのか、まさか本気であのベッドで寝ると言つつもりか。

突っ込みどころは沢山あったが、悠也はあえてそれを飲み込んで修の向かいに座る。

「……ま、お前ともしばらくお別れだしな。時間もあるし、もう少し話したくなつてな」

「は？」

「え、え？」

せつかく悠也が軽く恥ずかしいこと言つたにも拘らず、修は「は？何言つてんの？」みたいな冷たすぎる反応。

「いや、だって俺は今日から十日は魔界にいることになるんだぞ」

「それにどうして私が行かないこと前提なんだ？」

「えっ」

「……来るの？」

修ははあ、と深くため息を吐いて、マグカップに口をつけた。

「君たちだけで異界の地だなんて、心配で放っておけるか」

「ぶふっ！？」

「なっ……、なんだ、人がせつかく心配しているというのに！」

「……鏡見る」

言われて後ろの姿見に振り向く修。

「っ……！」

そこに映っていたのは、口元に牛乳がくつきりついた修の顔。

ついさつき、白ひげ状態のまま真顔で諭していたことになる自分を思い出し、修は思いつきり赤面する。それとほぼ同時に超スピードで口元を拭き取った。

「………」

「………」

沈黙が重い。

「……忘れろ」

新鮮だ！

これが、これがギャップ萌えというヤツか！ひょっとして、それを狙っての白ひげか！

ならば修、その策は大成功だぜ！ああ畜生め、俺は今、猛烈に萌えている！！

……と、悠也が心の中で絶叫したかどうかはわからないが、彼の右手が自然とガッツポーズを取っていたことだけは事実だった。

「……忘れる。いいな」

「……ああ、わかった。俺は何も見えていない」

そうして二人はひとまず平静を取り戻し、修は牛乳を飲もうとしてやめた。

「……つまりな、何も知らない悠と何もかもが不安なミリアだけでは、何かがあった時に対応できる気がしない、ということだ」

「ま、そこは否定しないけどよ。実際お前が来て何をできるんだ？まさか、お前も魔法が使えるなんて言わないよな」

「いや、言う」

「……ああ、やっぱりか畜生。もう、むしろお前は何ができないんだよ」

「んー……特にないな」

「えー……」

要はなんでもできるという、何気なくとんでもない発言をしながら、修は特にその話を広げる気はないようだ。仕方ないので悠也もスルーしようと思ったところで、修はポケットから何かを取り出した。

「なんだそれ？」

「これが私の使う魔法だよ」

それはマークのようなものの描かれた紙。修は慣れた手つきで紙を折り、ふと宙へ投げた。

「うわっ！」

瞬間、紙はポン、と弾け、小さな狐のような姿に変わった。手のひらサイズの狐は愛おしそうに修の手に擦り寄る。

「式神、というヤツだ。聞いたことはあるだろう？」

「あー……なんか、漫画とかで陰陽師かなんかがよく使うアレか」  
修は狐を撫でながら、背中をトン、と叩く。と、狐は先ほどの紙に姿を戻してしまった。

「ずばりそれだ。実はな、私の家系は代々陰陽師なんだよ」

「へえー……そりゃ知らなかったな」

初耳の情報に驚きながらも、悠也は思う。

昨日、魔法を信じさせる時もこれを使えばよかったんじゃないか  
……？



## 扉の向こうの初体験

そろそろ昼時を迎えるという時間帯の、向井家のリビング。そこに、魔界へ出発する三人と、それを見送る一人が集まっていた。

「それでは二人とも、準備はいいな？」

「ああ」

「はい」

出発する三人が手にするのは、樹の挿絵が描かれた青いカード。修に聞いたところ、この樹は世界の中心を表しているらしい。張り巡らされた枝々から様々な世界へ行く、という意味合いが込められているそうだ。

「いつでもどーぞ！」

見送る一人が手にするのは、煌びやかなデコレーションで彩られた携帯電話。

全く自然に携帯を構える母の姿を見て、念のため悠也は聞いてみた。

「……お袋よ、それは一体何に使う気なんだ？」

「せっかく魔法が見られるなら、記念に撮っておこうかとね」  
「なるほど」

納得しかけ、しかし、と悠也は思う。

傍から見たら呪文を唱えて消えるだけのこれを撮ったところで、それを動画越しに見た人は「ただ編集しただけ」と思うのが関の山ではなからうか？

「……まあいいや」

なににせよ、初の魔法体験だ。ただ記念として残すだけでもいいだろうと考えることにした。

「んじゃ修、そろそろ行こうぜ」

「……私もミリアも、君の話が終わるのを待ってたんだがね。よし、ではカードを掲げてくれ」

呆れ顔で修に言われ頭を掻きながら、悠也は二人に倣ってカードを天井に向けて掲げた。

そして、呪文を唱える。

『橋を渡す大いなる大樹よ、世界を紡ぐ偉大なる母よ。我が身を繋ぐ鎖を放ちたまえ、我が魂を封ずる鳥籠を開きたまえ。我は自由を縛られし奴隷に非ず、我こそは翼を持たぬ開拓者なり』

長い上に覚えにくく、オマケに痛い内容という三重苦。これのどこが「短くて覚えやすい」というのか。あいつは頭がいいから色々特別なんだろう、と納得することにしよう。

呪文の詠唱中、カンニングペーパーを手に悠也はそんなことを思っていた。

「って、なんだこりゃ」

呪文の詠唱が完了した瞬間、それぞれの持つカードが発光し出した。

慌てる悠也を見て、修は楽しそうに笑う。

「転送が始まるんだ。綺麗だぞ」

修が言う間もカードはエメラルドグリーンに輝き、その光はそのまま悠也の身に降り掛かってきた。

輝きに目を眩ませながらも、光が身体全体を包み込んでいくのがわかった。鱗粉のような光の屑が舞い、悠也を中心として回っているようだった。

「確かに綺麗だが……ちょっと眩しいな。目が痛くなってきた」

「え、ちょ、どうなってるのこれ！？光でなにも見えないよー！」

後ろからから翔子の声がかすかに聞こえる。翔子はすぐそばにいたはずなのに、なぜか声が聞き取りづらく感じた。

「しかし、これだけ綺麗なら撮り甲斐もあるだろうが……撮影も難

儀してるみたいだな、残念」

言う間にも回転は速度を増し、光もどんどん強くなる。やがて自分自身が光と同化したと感じるほどに強くなったところで

「あ、そうだ悠」

「……え？」

突然、視界がブラックアウトした。

「おおよ、やつと見えて……って、もうみんないないし！結局なにも写せてないじゃないのよー！！」

ちょうど正午を迎えた、向井家のリビング。

初めて魔法を目の当たりにして、一人残された翔子はそんなことを叫んだ。

暗転してから数秒間、エレベータで下るような浮遊感を経て、悠也は地に足の着いた感覚を取り戻した。

「な、なんだこりゃ！？いきなり真っ暗になったぞ、修！」

しかし、視界が暗黒に包まれているのはそのまま。

「うるたえるな。ドイツ軍人はうるたえないぞ」

慌てて声を上げた悠也に、内容は意味不明ながら返事はしっかり返ってきた。

「いつ俺がドイツ軍人になったと！？………というか、あんた誰だ？」  
しかしそれは、修のものでミリアのものでもない、落ち着いた少年のような声だった。

「ここがゲートってやつなのか？いやそれより、修たちはどこ行っ

「ただよ！？」

状況の急な変化に戸惑う悠也に、声の主は笑って答える。

「そんないつぱんに聞かれても答えられないよ。まあ、順を追って話すから落ち着きたまえ」

「……それもそうだな」

「よろしい」

なんとなく、修みたいな雰囲気の子だ、と悠也は思った。

「さて、まずはひとつめの質問だな。僕が誰か……か。簡単に言うと、君の魔力が具現化したものだ」

「魔力が具現化？なんだそりゃ」

「君は先ほど、生まれて初めて魔法を使ったろう？いや、正確には魔術だね。とにかく、君が身体を以て魔法を経験したことによって、君の中の魔力、つまり僕が目覚めたわけだ」

「えーと……つまり、お前は俺の体の一部……みたいなもんでいいのか？」

「実体は持っていないから体の、というわけではないが、認識としては概ね合っているね。僕は君の分身、というわけだ」

「ふーん……なんか、実感湧かないな」

いくら魔法を経験したとはいえ、この荒唐無稽な話をあつさり理解できるほど、まだ悠也は魔法関連の話に慣れていない。実感が湧かないのも無理はなかった。

「まあ、すぐにわかるさ。今はただ、そういうものだ、と認識していればいいよ。それでは次、ここはゲートなのか？という問いへの答えだが、結論から言えばノーだ」

「となると、一体なんなんだここは？真つ暗でさっぱりわからん」

「真つ暗？はは、そんなことはないさ。まあ、初めてでは勝手もわからないか」

声の主の回りくどい答え方に、悠也は眉をしかめた。

「なあ、もうちょっとわかりやすく頼めないか？俺もあんまり悠長な時間はないんでな」

「ああ、そうだったね。君と話ができるのが嬉しくてね、済まない」  
「ん……そうか」

どこか含みのある言い方だったが、悠也は特に気に留めずに言葉を待った。

「ここは、言うなれば君自身の心の中だ。まあ、今回は僕が呼んだのだけれどね」

「俺の……心の中？そりゃ、俺の脳内とか、そんな解釈でいいのか？」

「んー……口で言うより感じてもらったほうが早いかな。ここは他の誰でもない、『君の心の中』。そう強く意識してみるんだ」

言われるまま、悠也は『ここは自分の心の中』と頭の中で繰り返した。

「……おおっ!？」

すると、それまで何も見えなかった暗闇が徐々に晴れ、風景が視界に飛び込んできた。

そう、ここは……

「俺の、部屋か？」

無意識に出た悠也の言葉に、声の主は否と答える。

「見た目はね。君にとって最も落ち着く風景が再現されたんだ」

声に反応して、悠也はその方向へ向き直った。

今まで真っ暗だったが、今は周りが見渡せる。それは当然、声の主の姿も目に入ってくるわけで。

「やあ、はじめまして」

「……ああ、はじめまして」

声の主　彼女は、悠也と瓜二つの姿でベッドに腰掛けていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4571m/>

---

みりあっしゅ！

2010年10月30日05時10分発行